

あるという点から、洞窟は世界の象徴であると考えた。また、洞窟を取り囲む岩や石の堅固さは、形相に規定された質料に通じるため、洞窟は質料に密接に関係するものであるとも彼は考える。

次に、彼は水を司るニュンペーのナーイアスは、魂の象徴であるとした。なぜなら水は生命に欠かすことのできないものであるからである。

さらに彼は、洞窟内に置かれた様々な物品の示すことを明らかにしようとする。まず、石でできた混酒器や甕であるが、これは石の間から湧き出る水を表すと彼は考えた。次に石の機と海紫の布はそれぞれ骨と肉であるという。なぜなら石は骨に類似し、海紫の布は貝の分泌物で染められるからである。そして、蜂蜜については、神酒ネクタルと同一視されることから、魂を誕生へと向かわしめる快楽の象徴であるとした。

次に、北と南に向いた洞窟の二つの出入口であるが、ポルピュリオスはかに座とやぎ座にある天の門を通り魂が下降・上昇するという説により、これを説明した。かに座は北に、やぎ座は南にある星座であるからである。

最後に、洞窟のそばに生えたオリーブの樹については、世界を秩序にしたがい形成した神々の思慮の象徴であると彼は考えた。なぜなら、オリーブは洞窟のある入り江の先端、すなわち頭に位置するからであり、さらにオリーブは知恵の女神アテーナーの聖木だからである。

以上より、ポルピュリオスはニュンペーの洞窟を、世界、質料と形相、魂の上昇と下降といったものの象徴であると解釈し

ていたことが明らかとなった。また、彼は解釈を行う際に際して、プラトンのみならず、ピュタゴラス、エンペドクレス、ヘラクレイトスや、彼の同時代人であるヌメニオス、クロニオスなど、多数の哲学者の意見を取り入れ、さらにはゾロアスター教、ローマやエジプトの宗教、はては聖書までその典拠とし、地理学、博物学、語源学、天文学などあらゆる学問の知識を動員している。このような神話解釈の形式は、ポルピュリオス以前には類を見ない、特筆に値するものである。

また、すべての解釈を終えた後で、最後にポルピュリオスは、ホメロスは何らかの真理を基にして、それをほのめかすためにこれらの描写を行ったのだと述べているが、ここに彼の神話解釈への態度が如実に表れている。

すなわち、ポルピュリオスは神話を、真実を語るための表現形式の一種であると考えていた。この著作には、神話を単なる作り話と考えるたり、歴史的事実の隠喩と考える者がいたことも記されている。しかしポルピュリオスはそのようには考えなかった。彼は、神話を何らかの真理を象徴するものとして、哲学的に解釈するべきであると考えたのである。

プロクロスにおける「神に似ること」の問題

土井 裕人

プラトン『ティマイオス』における「神に似ること」については、西洋古代哲学の末期に位置する五世紀の新プラトン主義者プロクロスの『ティマイオス註解』でどのように言及・解釈されているかを検討することで、古代の宗教思想から中世など

への影響を考察することができよう。プラトンにおける「神に似ること」は語としては『テアイテトス』に登場するものの、その具体的な様相は宇宙論として知られる『ティマイオス』に見出すことができる。これは、円環動としてあらわされる宇宙の魂の思考を模倣することで、人間の魂を出生時にもたらされた混乱から本然のあり方に回復させることであつた。

この「神に似ること」を検討する手がかりとなるのがオケイマ、すなわち(魂の)乗り物という概念であり、プラトンにおいてそれ単独としては重要な概念ではなかったが、新プラトン主義においては三、四世紀のイアンブリコスあたりから重要度が増大し、宗教思想という観点から着目される。プロクロスによれば、類似しない不連続なものは相互に影響を及ぼせないため、上位者は何らかの類似した中間者によって下位の物体ないし身体まで接続される必要があり、その際にオケイマが要請されるのである。これは魂と類比的であつて魂を乗せて知性界と生成界を上下し、降下に際しても上昇・還帰に際しても、人間より上位の存在を模倣する。ここで特徴的なのは、魂の上昇について気息的オケイマを含めた後天的な付与物の除去が主張されるに当たり、プラトンの愛智の生に対する密儀的完成の優位が述べられることである。このように、プロクロスの「神に似ること」においては、模倣や似ることというテーマが深く関わっているとともに、哲学的要素だけでなく密儀宗教的要素も重視されているが、これはプラトンのテクストのみから直接には導かれず、新プラトン主義的解釈を踏まえたプロクロスの主張と言える。

以上を前提にプロクロスにおける「神に似ること」の様相を検討すると、彼は『ティマイオス』最終盤を参照し、常に幸福な宇宙・万有に似ること、人間自身もその原因の側へと導き上げられ幸福な者になるとする。この具体的考察には、模倣や似ることを念頭に「祈り」という論点を導入することが有効となろう。『ティマイオス』において、祈りは序論が終わり、宇宙論の本論に入る際に行われる。現代ではまず内容に興味を持たれない箇所であるが、序論も含めた全ての語句に意味を読み取ろうとするプロクロスは、人間は宇宙・万有の一部であるのでそれに対して祈るのがふさわしく、全体への還帰が救済をもたらすとした上で、「祈りのはかの者たちに祈る者どもを、彼らが祈る対象の者たちに結びつけ……」と、上位の存在に人間を結ぶという祈りの役割を語る。とりわけ注目されるのが、完全で真なる祈りが導かれる諸段階について、①神的な段階全ての知識②神的なものに対する類似を通じた親近性③神的諸実体に魂の最上部で触れる接触④神々とのより偉大な共同を与える接近⑤魂の統一を神々の統一そのものにうち立てる合一、という順で挙げられることである。すなわち、人間は類似(似ること)を経て真の祈りの頂点としての合一へ至るのであり、祈りという「宗教的实践」のテーマにおいて類似と合一が段階として位置づけられるとも言える。

このように、プロクロスにおける「神に似ること」には哲学的解釈の深化と宗教的要素の具体化の両側面が見いだされるが、これを哲学が迷信的な宗教に墮していく落日の過程と見るか、哲学と宗教が融合したある種の思想がいわば創造されゆく

過程と見るか、おそらく評価は分かれると思われる。しかし、彼においてそれら両側面は分離しているのではなく、表裏一体のものと捉えられることは注目されてよいのではないだろうか。

宗教伝統の倫理的意義をめぐる一考察

飯田 篤司

現代の倫理混乱の中、世俗化の中で通減しつつあった宗教伝統をはじめとする伝統的価値観や共同体の意義が改めて問われている。例えばエンゲルハートの「迷走」にも見ることでできるように、生命倫理問題においては、「自律」と「社会的合意」をめぐる相克は、一つの主要な問題系をなしている。倫理学説史的には、これは近代におけるリベリズム・リバタリアニズムの台頭と、それへのアンチテーゼとしての共同体論の展開として描かれる。宗教は本来、「自己決定の原理」としても、「社会的合意への背景・地平」としても機能するものではあるが、混乱の中に「指針」を指し示しうる希望として、宗教伝統の現代的意義も語られている。ただし、共同体論については、共同体自体が多義的で歴史的にも変容しており、その「共同体」の輪郭の不明瞭であることのみならず、それが「暴力」へと転化する権力論的視座が欠如しているといった問題が付きまとう。さらには共同体論の構想においては、共同体の外部へグローバル化社会の中でのその意義は問われよう。宗教伝統の意義を論ずるに際しても、こうした問いは不可避であろう。

こうした問題意識を踏まえつつ、宗教伝統の意義を再評価す

る試みとして、ジャンニ・ヴァッティモの「宗教の／への回帰」論を挙げることでしよう。いわゆるポストモダンリズムの系譜に属するヴァッティモが提唱する「弱い思考」は、解釈学の帰趨として描かれ、「すべては解釈にはかならない」という解釈一元論を透徹する。それはニーチェ、ハイデガーの形而上学批判を受けて、絶対的な起源や基礎づけを求める「強い」思考の暴力性を批判せんとする倫理的関心に貫かれたものである。ヴァッティモはその受肉概念やケノシス概念の解釈から、キリスト教はその当初から「神が現前しない」という「隔たり」を内包しており、むしろキリスト教史を辿りつき得ぬ解釈の歩みとして、本質的な偶然性に浸食された不断の自己創造として見なされる。そして「神が身を下げる」というケノシスが意味する「弱さ」の中に、自己の「弱い思考」との本質的な同一性を見てとり、その非暴力的な他者に対する愛の教説に今日的な意義を置いていく。こうしたキリスト教伝統の理解は倫理的関心に貫かれたものではあるが、そこではもはや宗教的伝統は絶対的な指針を指し示す基盤としてではなく、むしろ「科学／宗教」といった対立図式、引いては宗教の「真理」自体を溶解しつつ、他者への開放性を可能とする地平として宗教伝統に光を当てるものである。それゆえ単なる復古的な伝統回帰は、現実の被投性を忘却する反動主義として斥けられることともなる。

こうした本質的に流動的相における宗教伝統の理解には、当然その妥当性に疑義も寄せられよう。例えば実際、「弱い思考／強い思考」という区分さえも形而上学的な二元論へと転化し、「弱い思考」は「基準」として機能するのではとの批判がなさ